

いわきは第二の故郷になる —留学生と地域の在り方—

東日本国際大学経済情報学部准教授 田村 立波

いわきにやってくる留学生が増えてきている。この地を踏んだ本学の留学生の大半は5年間もの歳月をここいわきで過ごしている。留学生といえば、昼は大学で日本語や専門知識の勉強に励み、夜はアルバイトをこなして物価の高い日本での留学生活を支え、数年後には去ってゆく、いわば「過客」(旅人)のような存在だというのが一般的なイメージであろう。

しかしグローバル化が進み、地域社会を取り巻く情勢が変わる中、留学生と地域とのかかわりについて再考する必要があると考えられる。地域にとって留学生はどのような存在なのか、さまざまな面から捉えることができるだろう。留学生は「貴重な資源」である。

日本の関係省庁による厳格な審査を経て念願をかなえた彼らは、来日する前は教師、ジャーナリスト、経理担当者、合弁企業の通訳、会社員として活躍していたキャリアの持ち主で、いわば多士済々の多国籍集団なのである。留学生は「文化の使者」である。

彼らを通じてそれぞれの国の風俗習慣・社会状況等といった生の情報を知ることができ、また地域文化を創出していくためにも重要な役目を果たすことになる。言うまでもなく留学生は「消費者」である。衣食住の日常的消費を地域で行っており、立派な「お客様」というわけである。

同時に留学生は「地域産業の担い手」でもある。大半の留学生は勉強のかたわら、アルバイトをしている。新聞配達をはじめ、スーパー、飲食店、部品生産工場などで幅広く活躍して、裏で地域住民の生活を支えている。留学生は「親善大使」である。留学を終え帰国した彼らは、日本で学んだ知識だけでなく、地域の情報・文化をもそれぞれの国に持ち帰り、地域と世界を結ぶ架け橋として期待される。

このような多様な側面を持つ留学生が地域の表舞台に積極的に出て関わることにより、地域の情報や文化に触れられ、留学生生活をより豊かにすることができる。また市民からもより深く理解されることになると考え、本学でもさまざまな活動を行っている。

留学生と地域を繋ぐ一連の活動の中で、特筆すべきは昨年10月下旬から約2週間にわたって開催された「歩いて暮らせるまちづくりいわき地区社会実験」において留学生が大いに活躍し、中心市街地での賑わい創出に一役を買ったことである。中国留学生が屋台で餃子を現場実演し、素朴な家庭の味を真心を込めて市民に提供して、プロにも負けない上々の出来だと市民から絶賛された。

また、同時に実施された中心市街地の通行量調査にも各国からの多くの留学生が組織的に携わった。調査期間中、台風の接近により天候が急変し、季節外れの寒さとともに風雨も襲ってきた。寒さに震えながら通行量調査をしている留学生を、道路に隣接する店舗のオーナーが軒下に招き入れ、温かいお茶も出してくださった。

さほど大きな店ではないので、軒下に椅子を置くと、完全に「通せん坊」状態になってしまうにもかかわらず、雨が降るたびに招き入れてくださる。その人情の温かさに感謝し、留学生の地域への愛着も増したに違いない。しかし同じ商店街でも、目と鼻の先の別の店が留学生に対し全く違う態度をとっていたことは非常に残念だった。

留学生にとっても住み心地のいいまちづくりには、地域全員の共通認識であるべきホスピタリティーが必要不可欠だと痛感した。留学生が単なる「过客」（旅人）ではなく、日本人学生と同様に地域の「宝物」として、地域の中で育てていくものであろう。

人生80年で考えれば、同じ地で5年も過ごすというのはそう多くはない。留学生がここいわきを選んだ以上、ここは彼らの第二の故郷になるはずで、またそうなるようにさせてあげたい。そのために、地域全体の温かい支援をいただきながら、今後も教育指導にあたっていきたいと感じる今日このごろである。

最後にまちなかで留学生に出会ったら、ぜひ励ましの言葉をかけてあげてください。